

今月のハイライト

■ 職業病に対する新しいアプローチ法への期待

本誌では職業に関連して発症する疾患ならびに障害については創刊以来たびたび特集を組んできた。しかし、治療面の重要性は記すまでもないが、今回の特集を通読して強く感じたことは、リハビリテーションは単に障害に対するアプローチのみではなく、予防医学面にも関与すべき大きな課題があるということである。

■ 頸肩腕障害の発症に関与する職種

上肢に偏った負担がかかりやすい職種の場合、頸肩腕障害に罹患しやすい傾向がある。リハビリテーションや福祉に関係の深い職種としては、専任手話通訳者に本症が多発しているという。今後は全国レベルの調査が必要であろう。また、新たに労災補償認定などの社会的問題が生じる可能性もあろう（埴田和史氏，385頁）。

■ 職業性腰痛の原因にも地域の特徴がある？

農業人口の多い熊本県では農業従事者に職業性腰痛が増加しているという。早急の対策が望まれる（米満弘之氏ら，389頁）。

■ 脳血管障害の ADL 評価に対する提唱

SAIN は評価総得点の意味を重視したもので、脳血管障害の ADL 評価のスコア化のモデルになると考えられる。FIM などと併用すれば、さらにその有用性が高まるという（佐久間肇氏ら，411頁）。

■ リハビリテーション医についてのコメディカル・スタッフの評価

以前の評価と比較して、コメディカル・スタッフの多くがリハビリテーション医にチームリーダーとしての役割を期待している。しかし、その反面、未だに批判的な勢力もあることは否定できない事実である。これに対しては謙虚に受け止め、リハビリテーション医はさらに研鑽を積み重ねる必要があるとともに、急性期や全身状態不良例にも対応できる実力を身につけることが肝要である（伊藤元信氏，423頁）。

■ 障害児教育と職業問題にも時代の流れが……

障害児教育では一般の教育以上に、卒業と同時に就職に関連して職業が大きな問題となる。その理由は、職業を持つということは自立生活につながるからである。ただ、以前は障害者といえば身体障害者が問題になっていたが、昨今では障害の内容も時代の流れとともに大きく変化し、その数において身体障害者群と知的・精神的障害者群で逆転現象が見られている。これには医療の進歩やリハビリテーション技術の発展が寄与していると考えられる。今後は基礎的職業能力を科学的に評価し、21世紀に向けて適性な職域拡大を目指していかなければならない。そのためにもリハビリテーションチーム間の交流を今まで以上に密にし、連携を強めていかなければならない（リレー対談，449頁）。